

青鳳会資料 打鍼法の基礎

打鍼法の講習は、本日が第十三回となる。既に実践の先生が多数おられ、相当の実績を上げている由、嬉しい限りである。打鍼法について簡潔に解説している柳谷素靈の針灸の科学「実技篇」には、次の様にある。

打鍼法は夢分御菌意斎の創始せるものとされている。
打鍼法は撃鍼ともいい、丁度、大工が釘を金槌で叩き入れるように、槌をもって、鍼（打診用の鍼である）を叩き皮下に入れるのである。この方法は日本独自の鍼法である。

一、打鍼法の器具

打鍼法には槌と鍼があつて、特異のものである。槌は丁度、金槌のごとく、槌と柄から出来ている。その柄の前後或いは左右が、くり抜きになつていて、鍼を容れるようになつている。

著者（柳谷）が終戦前に所持していたものと、終戦後、先輩である横浜の山崎治助先生から寄付されたものでは、形にも、鍼の長短にも異なつた造りである。このことから、打鍼槌をつくり、鍼もその好みよつて作られたものと考えられる。鍼の形は九鍼の『鍔鍼』の如くである。『鍔鍼』も『類経図翼』の図説の如く、鍼柄と鍼体が同一の素材から出来ており、鍼体と鍼柄との境界からスリオロシ形にとがり、鍼尖がつけられている。鍼の全長の長は四〜七cm位あつて、鍼柄部の太さと、鍼体の初部はマッチの軸ほどの太さである。

槌にもその造り方が種々あつたようである。槌を象牙で作り、その内部に鉛をつめ、槌の両面には鞣皮を張つたものや、木質の槌の一面を凹かにし、これに、皮を張り付けたものがある。柄には鍼が刺し込めるようになつているので使用せぬ時は、二本の鍼と槌とが一つの器具となつているわけである。

二、打鍼法の押手

打鍼法の押手は拇指と示指を合わせて、指端を刺鍼部に立てる。それから、示指の爪面に中指腹を密着させる。従つて、押手の形は拇指、示指の指端で杉山真伝流の《筒立て》の形のようにするのである。鍼は押手の示指の爪部と中指腹との間に撮み立てる。挿立した鍼尖を皮膚に接せぬように撮み立てるのが必要である。

三、打鍼法の刺手

打鍼法の刺手は専ら、鍼槌の柄を撮んでいることになる。その手技は鍼柄頭を叩くにあるので、鍼柄をもって、鍼を刺すのではない。夢分の書き残した『鍼道秘訣集』に「鍼鋒の肌膚につかぬほどにして、皮を出ずることに痛まざるように打つなり。鍼入ること一、二分にして榮衛をめぐらし、肉の内に徹する法である。」ということが記載されている。

四、打鍼の仕方

打鍼の仕方については、皮と出ずるに痛まざるように打つなりといっているごとく、丁度、管鍼法の弾入のときのように打つべきである。実際、打鍼を行うには、鍼の重さを柄で量りながら打つ。四、五へん打つように振ってみて、調子をつけ、押手の鍼柄頭を打つのである。

打つ調子は輕輕、重重、輕重の如く打つべきである。著者（柳谷）の扱った患者で、岩石にもまごう程硬い肩こりの人が、普通の毫鍼では少しもつけず、一度打鍼流の鍼で行ったところ、この打鍼法の鍼で効果があり。次回からは打鍼流の鍼を所望するようになったので、この患者には、いつも打鍼流の太鍼を使用した経験をもっているが、打鍼の叩打とともに、輕快を訴えていた。とあり、打鍼の有用性を記している。

五、打鍼法の場所と効用

打鍼法は専ら、腹部に応用したものであった。その唯一の伝本である『鍼道秘訣集』（刊本として上野国立図書館に収蔵されている）によつて、施術の場所と効用を知ることができる。

◆鍼道秘訣集序

當流擊鍼ノ元ハ夢分翁初禪僧タリシ時悲母極テ病者ナリシカハ夢分歎之母孝行ノ爲時ノ名人タリシ醫師ニ逢テ捻針ヲ習得テ朝夕母ヲ療治シ病ヲ痊トスレト重病ニヤ驗モ無於茲夢分翁工夫ヲ費シ案ヲ廻メ此擊針ヲ以テ立ルニ手ニ應ノ驗ヲ取…………。とあり、腹部の打鍼法は、御園夢分齋が母の病気を治してやりたいという一途な念が新鍼法を編みだす原点となった。

◆夢分流の特徴

- 一、不問診
- 二、治療部位を面として把える（平面と立体）
- 三、疾病即気血のうつ滞（邪）として把えることを理念としている。
- 四、患者を疲れさせない。
などの特徴がある。

◆腹部のうつ滞（邪）

腹部の緊張した部分、圧痛やひきつれ等だが圧痛を伴わない場合もある。皮膚温が低く冷えている部位に疼血がある。

◆鍼灸重宝記 本郷正豊

打鍼は深く刺すなかれ。一身は榮衛をもって主とすることなり。気は陽、衛なり、血は陰、榮なり、気は外をめぐりて筋肉を温め、血は筋の内をながれて肌膚を潤す。これに依て打鍼はふくとして槌にてうつゆへ榮衛をうごかし骨髓へ徹ゆる理なり。と打鍼の効果の大きさと刺鍼の際の留意点を指摘している。

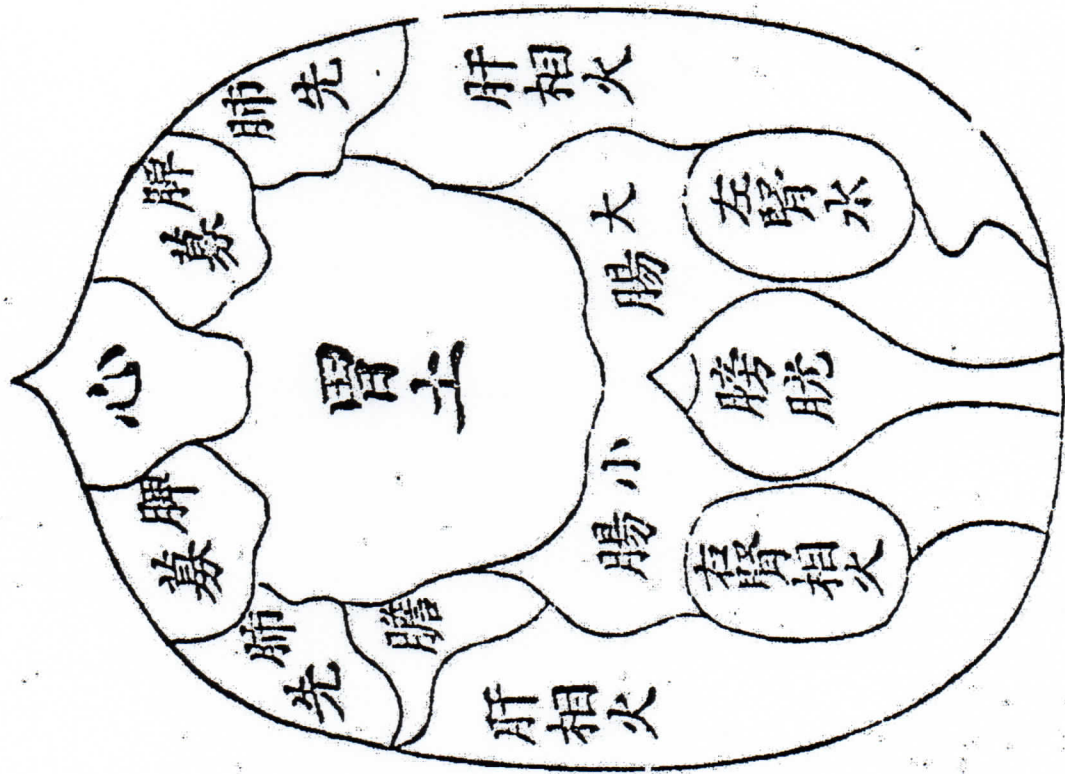
◆鍼道秘訣集（鍼灸重宝記）

手法

左の手にて病人の腹をうかがひ、押手で拇指と示指を合わせて指端を刺鍼部に立てる。次に中指を示指のうしろに重ねて、密着させる。針を左の中指と食指の間にさしてはさみ立て、ハリ先の肌にさはらぬほどにして槌をとり針を打つなり。皮を切るに痛まざるように打つなり、針入ること一分ほどにして槌に手応えあり。二、三分より深く入るべからず、打つて榮衛をめぐらし、推して肉の内に徹する法である。

針を抜いて後針口を閉づべし。推手つよく槌をかるく打つべし、推手はよく槌になまりあれば痛むなり。槌の打ちようは乱になく一、二とかぞゆる如く手づまよく打つべし、打針の本意は腹ばかりに用いて外の経に用ひず諸病はみな五臓より生ずるにより其の本を求めて治す。

夢分流臟腑之圖



一、心臓

鳩尾俗水落ト云ウ是ヲ心臓ト號ス

經穴……鳩尾 巨闕を中心とする部分

二、脾募

鳩尾ノ両傍ヲ脾募ト號シ脾臓病ヲ知是處ニ邪氣有日ハ手足口唇ノ煩
両肩痛ニ等アリ

經穴……不容 承滿を中心とする部分

三、肺先

肺先ハ脾募ノ両傍也茲邪氣住スルトキワ息短ク喘息痰出肩臂ノ煩ヒ
出ル

經穴……期門から腹哀を中心とする部分

四、肝臓

肝臓ト號スルハ両章門並ニ章門ノ上下也。茲邪氣出ル日ハ必ズ眼目
ノ痛疝氣淋病胸脇攣痛ニ息合短ク究テ短氣ニソ酸物ヲ好ムヌハ足ノ
筋攣ル

經穴……左右章門、大横、腹結から居髎の部分。

五、胃土

胃腑ハ鳩尾下ト臍ノ上下ノ間ニ住スル維人間ノ大事トスル處一身ノ
付處トス萬物自土生ノ還終リ入ル土

經穴……上脘より梁門、水分に至る部位。

六、腎

經穴……大巨から帰來の部分

七、膀胱

經穴……関元より曲骨に至る部分

八、大腸・小腸

經穴……天枢から外陵、氣海を含む部分。

九、膽（右側のみ）

經穴……腹哀を中心とする部位

次の項は実践的応用術（鳳観流）としての手法を紹介します。これは私の臨床実践に基づくもので初学者も短時間で簡単に習得が可能です。

一、押手

左手の拇指を除く四指にて打撃部位の変調（圧痛冷え引き攣れ）を精査確認し、中指をもって前揉捻を施す。そして、その中指に拇指を合わせ、押手を作り、同時に示指を屈曲させる。次に押手の間隙に鍼を垂直に皮膚面に痛みのないように立て、曲げた示指を伸展させ、拇指爪の上に重ね置き、鍼の安定保持をはかる。

二、刺手（柄の把手）

右手の拇指中指、示指の三指を柄の中央からやや先端を筆を持つようにし手の掌を少し上に向ける。その際、手関節の力はやや抜くようにする。

三、打鍼の方法

鍼道秘訣集に「皮を出づるに痛まざるように打つなり」とあるが如く皮部への刺激はあくまでもやさしく丁寧に行い、術後は必ず後揉捻を施す。

◇打鍼の種類

◆補打

槌の柄の中央よりやや根元を持ち槌の打面の下方で鍼頭に軽い（弱い）打撃をゆつくりまたは、早く行う。

◆寫打

槌の柄の中央よりやや先方を持ち槌の打面の中央部で鍼頭に重い（強い）打撃を早くまたはゆつくり行う。

臨床においては、補打、寫打を単独に、または、複合的に手毬をつくように調子を整て行うのがこつである。

平成三十年十一月二十五日

齋藤鳳観

青鳳会資料 打鍼法の術式と応用

鍼道秘訣集には四十種類の病証に対する術式が納められている。
本日は、その中で最も繁用されるであろう術式を幾つか紹介します。

◆病証に対する針術

一、火曳之針

是針ノ術ハ臍下三寸両腎ノ真中也。……

上ル氣ヲ拽下ス針也。

二、勝曳之針

是針ハ大實証ナル人ノ養生針ノ日扱又傷寒ノ大熱傷食ノ節用ル、
處定ラズ邪氣打拂ヒ針ヲ曳是瀉針也。

三、負曳之針

是モ處不定病証ニ依テ邪氣ノ隱居日針ノ其邪氣ヲラビキ出ノ療
治スル事アリ加様ノ針ヲ用ル病人ハ何氏病証難知……

邪氣ヲ曳出ノ様子ヲ觀療治セント欲日用ル針ノ方便ナリ。

四、散針

處不定大風吹來テ浮雲ヲ拂ガ如ク無滯サラサラト立ル是日ノ心
持成程心輕重氣成事無可立。

萬病皆以テ氣血ノ不順ヲ滯ルニ依テ生病也。シカレバ滯ル氣血
を解針ナレバ此方ノ心輕ク持テ更更ト可針諸病共ニ用ル針ナリ

五、實之虛

實ノ虚ト云腹ハ臍ヨリ上ハ實ヲ臍ヨリハ下ハ虚無カラ云加様ノ
腹ハ上氣シ又ハ息短ク食後ニ眠來リ又ハ氣属シ易クタメ息アク
ヒシ肩胸痛事アリ大方ノ人腹持悪敷ナド云ハ是腹也。本道ニテ
云ハ脾胃腎虚ナト見立ベシ両ノ脾ノ募両ノ肺先胃ノ腑ニ針
スベシ

六、虚之實

虚ノ實ノ腹ハ右ノ腹ト違臍ヨリ下皆實邪ニノ臍ヨリ上ハ虚也。
併無病ナル人ノ腹ニ如是アルハ吉既ニ煩腹ニ如斯腹下カ腰痛カ
小便不通淋病大便結スルカ女ハ腰氣アルカ月水不滯カ疝氣瘀血
等ノ煩ヒ傷寒ノ裏証又ハ湿ヲ受受寒タル人必ズ是腹ニノ足ノ病
アル物也。

七、一ツ之針

諸病共ニ色色治療スルトイヘ凡効無時ハ神闕ニ針スル也最モ治
療大事也能見究テ可針也。

八、相引之針

是モ處不定和ナル鍼虚勞ノ証老人養生針ニ用ル邪氣ノ曳ト針ヲ
引クト相曳ニ引針也補鍼トモ可言。

九、車輪之法

諸病共ニ邪氣ヲ根トノ可立邪氣アラザル處ニ不可立無過ヲ討伐
スルガ如シ何様ノ煩ニテモ兩脾ノ募兩ノ肺先章門兩腎胃ノ腑ヲ
見分療治スベシ右云フ處ノ分何様ノ病ニテモ此處ニテ療治スレ
ハ車ノ兩輪ノ如ク療治早廻トノ心ニテ車輪ノ法ト號スル也。

◆応用実践

夢分流の打鍼法は『腹部』にこだわった処置法だが、御園意斎以
前は腹部以外の身体部に刺鍼を行っていたとする古典記載があるよ
うに、腹部外の部位にも施鍼が可能なのである。従って、現代の毫
鍼による施療の如く打鍼法による各部位への直裁的、あるいは誘導
法的な方術は有効的に活用できるものと考えられる。

そこで本日は、打鍼術による遠隔誘導法を二つ紹介します。この術
式は、ある特定部位の圧痛の改善並びに緊張感を緩めることができる。

- (一) 足の陽明胃経の「髀関」穴がある前腸骨棘の下方、縫工筋と
大腿筋膜張筋の間の陥凹部の緊張が緩解し圧痛が改善する。

◆取穴……①三陰交

- ②夢分流腹診図の「肺先」

(二) 足の太陽膀胱経の「承山穴」足の少陰腎経の「築賓穴」足の太陰脾経の「地機穴」がある腓腹筋、ヒラメ筋の緊張が緩解し腰仙部の圧痛が改善する。

◆取穴……湧泉

平成三十年十一月二十五日

齋藤鳳観